

のなかで人間はどう生きていけばいいのか。他の生物、植物とどう共生していくのか。……人間同士が力を合わせて生きていく。『消費者』と『生産者』が対立しない。この両者を越えたところにあるものを探っていくこと。どうやって人間同士が手を握りあっていくのか」というテーマを出さ

れ、この探求を「協同」と名づけられています。協同集会は、東北集会において、こうした素晴らしい講演者や報告者を得て、いよいよ「生命・労働・地域の再生」という深みに降りながら、21世紀の協同のあり方を話し合い発信する場となっていくのではないのでしょうか。

協同と出合って

宇佐美 泰雄 (秋田県／精神障害者家族会、秋田あすなろの会・会長)

精神障害者の家族として家族会活動にかかわって早くもひと昔過ぎてしまい、齢も古稀を通過してしまいましたが、数多くの方々のご協力もありようやくして精神障害をめぐる法的整備の進展が目覚しく、今また「協同」にめぐり合ったことで先のことは分からないながらも、期待の芽がふくらむ思いと或程度の精神障害についてのPRも兼ねて寄稿依頼に応えることにしましたが、依頼された方の思惑とは大きな隔りがあるような危惧を感じています。ご容赦下さい。

精神障害者について

脳の病気をもった人の総称ですが代表病名は精神分裂病と言われています。誰が名付けたか判りませんが病名が人を傷つけ、社会理解の大きな壁となっている典型のような病名と思います。

わが国の場合近年に至りようやくして、精神障害者は脳の病気と病気による障害とを併せもっていることが認められ、精神障害をめぐる法的整備が進められていることは喜びにたえません。

しかし極めて長期にわたり社会から隔離されたと言うより、むしろ社会から拒絶されてきた歴史を思うとき本意ながら一朝一夕の修復は考えられず、地道ながら一人でも多くの理解者を増やす活動の継続が求められるものと考えていますが、関係家族の非力などで遅々として進まずが実情であり、それだけ難しい病気と障害でそれ故にこそ

難題であるのかも知れません。

病気の原因説は数多くひとり歩きしましたがいまだ特定されておらず、もちろんのこと障害の発生メカニズムの判らないまま、医療も試行錯誤をくり返しながらも進展しつつあるのが実態でなろうかなどと思っておりますが、対症療法でもある精神薬剤の進歩に期待しております。

適切な服薬コントロールにより精神障害者への誤解や偏見が徐々にでも是正することができれば、社会復帰や社会参加の機会が大きく飛躍し社会理解の拡大につながるものと思っております。

精神障害者家族会について

わが国は昔家族や一門それに集落が責を追う連帯社会として運営されていたことで、社会から拒絶されていた精神障害者を抱えた家族は、それを必死に隠しただろうし悩み嘆いたことでしょう。

戦後はその尾を引いたまま経済優先、効率第一をつっ走ってきましたが、敗戦は或程度自由や人権の回復を得たことで、同じ悩みをもつ家族団体の設立を先覚の方々のご援助で行ない全国組織の発足ができたのが昭和40年、47都道府県に連合会が揃うまで約30年を要したことはそのまま問題の困難さを示していると思います。

しかし幸いにも国際的な動向や関係家族の強い要望が重なり、精神障害者をめぐる環境もこの10年位で精神衛生法が精神保健法となり、去年は精

神保健福祉法と変わったほか障害者基本法の改正で、精神障害者も障害者として法律に明定されるなどの急進展はあったが、長い間にわたる病気や障害に対しての誤解や偏見は、当事者や家族を含め根強いものがあり広範な啓発を必要としています。

現在全国で約1200ある家族会の活動も当初の苦悩を分かちあうことから精神障害者を正しく理解する啓発の分野や、障害者の社会復帰を支援する活動、障害者福祉を充実向上させる活動等相当の広がりを見せているものの決して力のある団体ではありません。

殆んどが思春期以後に発病し或程度病状が固定し服薬コントロールができるまで長期にわたることや、家族が精神的ショックから立直るまで時間を要する病気特性から会員の高年齢は避けることのできないのが現状ですが、障害者の一番身近かな存在として組織の歩みを続けているのが精神障害者家族会であります。

「協同」とめぐり合っと思う

精神障害者家族会の活動を通じ社会の動向に触れながら、障害者をめぐる関係法が例をみない早さで改善されることは嬉しい限りであるが、関係者として運動の前途や障害者の社会的立場の将来に漠然とした不安を感じていた。

ようやくにしてノーマライゼーションが言われ、「共生社会」などもマスコミに登場し、なんとなく幻想を抱かせる雰囲気のみはつくられつつあるように思えることは否定できない。

しかしこの国で真剣な論議も苦勞体験のないまま、「共生社会」の実現が期待できるのだろうか、つい問い返しているのは年のせいだろうか。

戦前の貧しさや帝国主義社会の崩壊を見聞し、何の反省もなく敗戦による民主主義に乗りかえた戦後は、なりふり構わぬ経済優先、効率第一主義の競走社会が当然として受入れられている状況に接するとき、題目どおり弱者の入りこめる社会が果して一隅にでも存在できるのか、と潜在的に思う心が不安につながったものであろう。

このような疑心暗鬼の心境で揺れていたとき「協同」とのめぐり合いがあり、或いはと期待することで気持ちの持直しができたように思い、心になんとなく響くものがあり幸いだった。

私達が一番身近かな家族として細々ながら支援している障害者は人間関係の維持が不器用で、社会生活に適應する能力の低い特性を持っている。

これまでわが国が猛進してきた路線には中々馴染まないことで、正しく理解してもらえない一因となっているが「協同」の基礎をなしている支え合うことや「非営利」は、私等の活動方向と一致するし、たとえ歩みは遅くともまたはその輪は小さくとも、このような動きが社会に明確な芽生えをみせたことは喜びに堪えない。

必然的なことながらわが国の場合、これまでの経済万能路線が行き詰りを示しており、できるだけ早期の転換が求められているが、様々に世間を騒がしている現下の状況は、巨大な日本丸が針路変更の際してもだえる姿であり、また真の人間社会を模索する混乱期と解している。

長い間社会から疎外されたり或は否定されてきた障害者も社会の構成員として、あるがままそれなりに社会の表で生活することも、「協同」の活動の成果として、いずれ実現できる日のあることを祈る心境でいる。

障害者がもっている社会的、或は機能的ハンディを、まわりがちよっと補なうことでそれなりの活動が可能なのは以前から知られており、大胆な発想の転換があれば障害者が障害者を支援し、老人施設で障害者が手伝うなどの多彩な組み合わせが可能となると考えている。

経済優先社会、健常者優先社会は多くの弱者を犠牲にしながら繁栄してきたことを、謙虚に反省して見ることにより、割合歩き易い「協同」の道が展げるような気がする。未知のものへの挑戦の気持ちで活動へ入りたいと思っている。